

学位請求論文要旨

真宗民俗の複合性に関する事例研究

―北陸地方の真宗門徒の講・寺院・墓をめぐって―

本林 靖久

【論文の要旨】

本論文は、北陸地方における真宗門徒の民俗、つまり、真宗民俗の実態を真宗と民俗にかかわる多様な人々の事例を踏まえ、多角的な視点から探求するものである。とくに講・寺院・葬墓をめぐる事例の調査研究を中心に構成している。具体的には真宗門徒が地域社会の習俗・慣習の行事をおこなう事例を二つの観点から考察する。ひとつには、これらの事例に真宗と民俗のシンクレティックな関係を見る。シンクレティックな関係においては真宗と民俗宗教が接触して生じる重層化の過程を把握しようとする。もうひとつには、真宗門徒個々が門徒でありつつ、民俗行事をおこなう自らのありようをどのように意味づけているのかを明らかにしようとする。

近年、真宗門徒の民俗に注目する研究はいくつか発表されており、真宗門徒が地域社会のなかで世代を超えて伝承してきた習俗や慣習などの集合的事象を指す真宗民俗という表現が定着している。本論文でもこの表現を採用する。

本論の第一章では、北陸地方の伝統的な真宗村落を取り上げ、現存の真宗民俗から、真宗布教以前の宗教民俗を探り、真宗門徒による民俗の真宗化の実態を説明した。

第一節では、北陸地方の真宗門徒における蓮如信仰との関わりを通して、門徒の民俗宗教的諸習俗に対する態度がどのようなものであったのかを考察した。その結果として、蓮如信仰が真宗門徒に民俗宗教を内在化される役割を果たしてきたことを指摘した。

第二節では、仏教宗旨の相違が、村人の宗教生活にどのような影響を与えているのか、各村落の仏教系・民俗系の講集団の把握に視点をおき、真宗門徒と他宗旨檀家との民俗宗教に対する態度を比較した。その結果として、真宗講の形式も従来行われてきた民間信仰の講の機能と形式を踏襲したものでありながらも、門徒の行動様式を規制するうえで、真宗講の存在が大きく、講に集う門徒の凝集性が「門徒物知らず」と呼ばれるような外部の信仰に対する非寛容な態度を執らしめていたことを明らかにした。

第三節では、近現代に至る真宗の在俗の念仏指導者（道場主）を伝統的な門徒と自覚的な門徒の両面からおさえ、その念仏指導者を中心に維持される道場という門徒の信仰空間の「場」の実態と変遷を捉えてみた。その結果として、在俗の念仏指導者が地域社会の儀礼慣行を持続する大きな原動力となってきたことが明らかにされるとともに、道場での儀礼慣行を通して門徒は真宗の世界観を育み、在俗の念仏指導者を育ててきたことを指摘した。

また、第二章では、蓮如を開基とする城端別院善徳寺の近現代の変遷を通して、地域社会における真宗寺院と門信徒との動的な関係を考察した。

第一節では、近代以降の寺院経営の困窮化のなかで、創られた真宗民俗といえる開帳法会（出開帳と居開帳）を通して、護持と運営に関わってくれる門信徒との結縁を求めて動き出す善徳寺の実態を報告した。善徳寺では、明治時代になって一気に寺院経営が悪化するなかで、積極的に活動を外に展開していったのが法宝物巡回布教であり、寺院の門戸を開いて、門徒にさまざまな役割で寺院に関わってもらおうとしたのが虫干法会であった。その意味では、巡回布教は「動いていく寺」、虫干法会は「開放していく寺」を象徴していることを指摘した。

第二節では、大正時代に善徳寺の一人娘で裏方となった大谷貞子の薄幸なる死と女性門信徒が住職排斥運動を展開する歴史的経緯を踏まえつつ、現在の虫干法会において大谷婦人会が貞子の遺品を語るこの意味を考察した。

第三節では、昭和二〇年代に善徳寺を来訪した柳宗悦の「土徳」の言説によって、地元の人々が真宗としての生き方を問い直すことになり、そのことが郷土意識の高揚に繋がった過程を考察した。そこには近代教学を掲げて城端別院善徳寺の輪番となった加藤智学と、伝統的な信心の風習に価値を見出そうとする柳宗悦との二人の関係が、対峙するような立場でありながらも、両者はお互いを認め合い、尊重する間柄であったことが、善徳寺の発展に繋がったことを指摘した。

第四節では、現在の善徳寺の年中行事や善徳寺を護持する門徒の講集団を取り上げ、寺院と地域社会の関わりを提示した。次に、第三章では、真宗門徒の死生観と密接に関わる墓制において、真宗地域に顕著に見られる無墓制や墓上植樹を取り上げ、真宗門徒の宗教世界観と独特な民俗が持続してきた背景を論じた。

第一節から第三節までは、無墓制の習俗が成立した背景を事例ごとに考察し、無墓制の形態が持続してきた要因として、真宗門徒が従来の墓制を内容的に踏襲しながら、伝承的教義に合致する形態を与えてきたことを指摘した。

第四節では、無墓制とは別に、墓域に松や杉の苗木を植える墓上植樹の習俗について報告した。無墓制と墓上植樹は、真宗布教以前の習俗であり、無墓制は真宗化するなかで真宗門徒の民俗となつて存続してきた。その一方で、墓上植樹は真宗化とは関係なく真宗門徒の民俗となった。しかし、真宗地域に墓上植樹が持続してきたのは、門徒にとつても残存することに意味があるからであり、そこに真宗と民俗の一面が表出していることを指摘した。そのうえで、第五節では、この墓上植樹の地域で、村内に手次寺を持たない一部に門徒に遺骨尊重観念が生じると、僧侶の教化の及ばない状況で門徒の主体的な行動として創られた民俗が、残骨を菰に入れて木に掛ける骨掛け習俗になったことを指摘した。

第六節では、真宗布教以前の残存する墓上植樹の民俗を真宗化と関係なく、門徒の民俗として持続してきた背景にどのような意味があるのかを考察し、門徒が真宗の信仰のなかで生活しつつも、日本人の固有の靈魂観念を基層に持っていることを明らかにした。

以上、さまざまな事例を通して、北陸地方の真宗民俗について、文化変容の視点から歴史的変遷を捉えるとともに、真宗民

俗に生きる個々の門徒が、儀礼の場における個人レベルや家あるいは村などの集団レベル、信仰的自覚の有無などの多様な局面の複合する関係性のなかで、儀礼慣行を実践している実態を把握し、真宗民俗に生きる門徒の意味世界を探究することを目的として考察を行ってきた。

結局のところ真宗民俗は世代を超えて伝承されてきた真宗行事としての儀礼慣行ばかりではなく、真宗門徒や門徒集団による能動的かつ選択的な行動の所産によつて形成してきたものであり、残存する民俗も創られた民俗も内包されている。そのような民俗を内包する門徒の意味づけが重要な問題となる。

真宗信仰とは、教義上においては「阿弥陀仏」信仰である。しかし、真宗教団から言えば、「阿弥陀信仰」と「開山信仰（祖師崇拜）」をもつて了解されている。また、真宗門徒にとつて真宗信仰とは、「阿弥陀信仰」と「開山信仰」に加えて「民俗信仰（祖先崇拜）」を内在化したものであり、門徒はそのような真宗を信仰し、日常生活を営んでいる。つまり、真宗門徒における信仰形態は、基本的にはこれらの三項図式によつて提示することができた。

したがって、真宗民俗を論じる場合に、一般的には「真宗Ⅱ民俗宗教の否定」というステレオタイプが定着しているが、真宗門徒の民俗に対する姿勢や関わり方、その歴史的過程については詳細に考察していく必要がある。そこには、真宗地域において、真宗門徒をただ法義に厚く民俗に冷淡な人々と位置づけるのではなく、民俗社会に生きる人々として位置づける作業が、真宗地帯といわれる地域においては必要であると言える。そうした各地域の記録の集積が全体として真宗民俗を形作り、真宗民俗をより一層、明らかにしていくことになる。そのためにも「真宗民俗誌」の構築が必要になることを今後の課題として提示した。

【目次の構成】

序章 真宗民俗論をめぐる視座と方法―真宗と民俗宗教のシンクレティズム研究の再考―

第一節 研究の対象―真宗門徒と民俗宗教―

第二節 研究の目的―柳田民俗学と真宗研究―

第三節 真宗と民俗宗教の文化変容―シンクレティズムの視点から―

第一章 真宗民俗の重層性と講の役割

第一節 真宗門徒の宗教生活における複合的性格―北陸門徒の講組織と民俗性を通して―

第二節 真宗門徒の重層信仰と講集団―真宗村落と他宗旨村落の民俗相の比較から―

第三節 近現代における真宗門徒の共同体と信仰形態―真宗道場と道場主の変遷を中心に―

第二章 真宗寺院を支える地域社会―城端別院善徳寺と門信徒の関わりから―

第一節 近代の開帳法会の成立とその展開―城端別院善徳寺の法宝物巡回布教と虫干法会とをめぐる―

第二節 近代における真宗と女性―城端別院善徳寺の女性門信徒の行動と変遷を通して―

第三節 真宗の土徳と郷土の形成―柳宗悦と城端別院善徳寺の関わりから―

第四節 今を生きる真宗寺院―城端別院善徳寺の年中行事と講集団―

第三章 真宗門徒の葬墓制と他界観―無墓制・墓上植樹・骨掛け習俗をめぐる―

第一節 無墓制にみる真宗門徒の行動様式―福井県三方郡三方町佐古・田名の事例から―

第二節 無墓制村落の形態とその宗教世界観―滋賀県坂田郡伊吹町甲津原の事例を中心にして―

第三節 現代の葬墓制をめぐる一考察―真宗地域の無墓制を手がかりとして―

第四節 真宗村落の葬送儀礼と墓上植樹―石川県河北郡津幡町種の事例を中心として―

第五節 真宗門徒の骨掛け習俗と遺骨崇拜のゆくえ―石川県旧河北郡の事例から―

第六節 墓と樹木の一考察―墓上植樹と梢付塔婆をめぐる―

結語 本論のまとめと今後の研究に向けて